

11/27(日)～12/25(日) 休館日：12/5(月)、12/19(月)

「和紙と日本画 一近代日本画の巨匠たち」

日本画の殆どが絹に描かれていた時代に、和紙の特産地であった福井県今立町で画紙が漉かれるようになります。やがて理想の紙を求める日本画家と工夫を重ねる紙漉職人とのやり取りのなか、数々の日本画紙が誕生しました。現在では日本画の90%以上が和紙に描かれるまでになりましたが、その背後に絵絹から和紙への画期的偉業があったことを、日本画作品や、岩野家所蔵の近代日本画家や学者等の書簡を通してご紹介します。

① 絹と中国の輸入紙の時代……

明治までの日本画は絹に描くのが最上とされ、紙に描く場合でも中国の画紙を好みました。[図1] そのようななか、古来より紙漉きの産地である福井県越前市では明治30年ごろから日本画紙を漉くようになり、雅邦紙など日本画の巨匠の名がつけられた日本画紙が相当数生産されていました。



【参考画像】
【図1】狩野芳崖「伏龍羅漢図」
明治18(1885)年 紙本着色
中国から輸入された竹紙を使って描かれています
※今回は展示されません

② 日本画用画紙の誕生……

明治から大正にかけての日本画壇は、江戸時代までの伝統画法や西洋の写実表現などから幅広く手法を学ぶことで、新しい絵画を創造しようとしていました。日本画家たちは西洋の絵具を用いたり、日本画の命とも言える輪郭線を廃するなど、独自の表現を追究し、それぞれに合った画材を求めました。画家たちの画材に対する積極的な姿勢に加え、明治期には清朝末期の混乱のためか中国から上質の紙の入手が困難になったこともあり、国産の質の高い画紙の開発が待たれていました。越前和紙職人・初代岩野平三郎は大正7、8年頃から学者の牧野信之助の助言で日本画紙の製作に取り組み始めました。富田溪仙や竹内栖鳳、横山大観など日本画革新の最先端で活躍する画家たちに新製の画紙を送り、何度も批評を仰ぎながら漉きあげ、徐々にその質が認められるようになりました。

③ 麻紙の復興と岡大紙の完成……

岩野平三郎は歴史学者・内藤湖南より麻を原料にした紙の復元を依頼されます。麻紙は奈良から平安のはじめ頃までよく漉かれていましたが、やがて楮や雁皮を原料とする紙に取って替われ、その技術も長く失われていました。岩野平三郎は試行を重ね、大正15年、麻の他に楮や少量の雁皮を混合することによって強靭さと肌理の細かさの両方を備えた、全く新しい麻紙を誕生させることに成功しました。

同年には、横山大観による求めで早稲田大学壁画のための画紙、史上最大一枚物の和紙・岡大紙を完成させました。その5.4m四方の紙には横山大観と下村観山の合作「明暗」が描かれ、人々を驚嘆させました。

④ 和紙の普及……

横山大観は岩野平三郎の和紙を久邇宮家[図2]、東伏見宮家、九条家など宮家や華族、実業家に紹介するなど、新生日本画用紙の普及に熱心でした。昭和3年、昭和天皇の即位の大礼にあたり悠紀・主基の屏風が新しく調製され、その料紙の調製が岩野平三郎に下命があったのも、それまでの実績と横山大観の推薦があったためと考えられます。この時漉きあげられたのは「白鳳紙」という紙です。

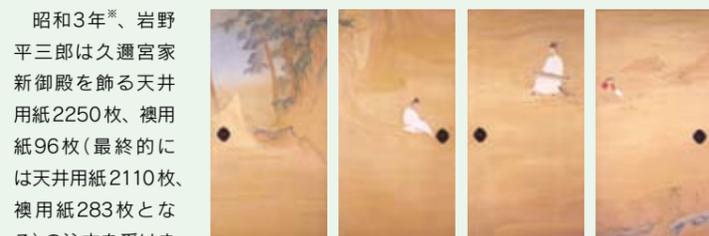
⑤ 絵絹から画紙へ……

昭和初期は絵絹から和紙への転換期にあります。絵絹では限度があった大型の作品や、絵具を厚く塗り重ねる表現も和紙は可能にし、その普及が進むと同時に日本画の表現の幅も広がりを見せました。現在ではその多くが和紙に描かれるようになった日本画ですが、紙漉き職人と画家たちの挑戦が生んだ結晶であるということ、またそれを生み出すまでに大変な苦勞があったということは常に立ち返りたい原点といえるでしょう。

「然し、畫家と云ふものは一面頗る我儘でもある。表面一應はこんなに易々と誕生したかの如くに見え、やがて歓迎さるゝに至った麻紙製作の裏面には、一方如才なき激励の言葉があると共に、どれ丈け多くの畫家達から不満足と苦情とが持ち込まれたことか、然し、岩野君は、黙々として之に堪へ忍んで、唯一途に満足と與へるまで、黙々として我慢して、少からぬ苦慮を拂つてゐたので、とう／＼これ迄に漉きつけることが出来たのである。」

(麻紙の復元と五箇の漉場を訪ねた畫家たち「和紙研究」第四号 114頁 牧野信之助 昭和14年12月発行)

〈作品紹介〉



昭和3年*、岩野平三郎は久邇宮家新御殿を飾る天井用紙2250枚、襖用紙96枚(最終的には天井用紙2110枚、襖用紙283枚となる)の注文を受けました。昭和5年に久邇宮家襖絵

久邇宮家の襖絵として納められたこの墨仙作品[図2]は、そのとき岩野の紙、白鳳紙で腕を振るった東西の多数の画家たちの作品の一つと考えられます。

※堀十五郎書簡(久邇宮家御殿天井画襖用料紙の注文)昭和3年2月19日

* * *



【図3】富田溪仙「越前紙漉」
大正15(1926)年頃 絹本着色

富田溪仙[図3]は大正14年に越前の紙漉きの現場を見学してスケッチを行い、その風景を何度か日本画に描いています。溪仙は日本画家たちが日本全国の風俗を分担して描いた大正天皇・皇后銀婚式のための献上絵巻(大正15年)に「越前紙漉」、再興第15回院展(昭和3年)に「紙漉き」(二曲一双屏風 絹本着色 東京国立近代美術館蔵)を発表しており、本作はそれらの作品の前後に制作されたと考えられます。

* * *

竹内栖鳳[図4]は奉書風の紙を好み、構想が思いついたときにすぐに筆を下ろすことができるよう、理想の紙の安定的供給を望んでいました。越前和紙職人・初代岩野平三郎に依頼すること数年の後、納得の紙が出来上がり、栖鳳紙と名付けられます。栖鳳は楮に少量の竹のパルプを混入し、色白く薄く漉いたものを好みました。



【図4】竹内栖鳳「満林秋色」
昭和12(1937)年 紙本着色

この作品は栖鳳紙ではなく銀漉紙が使われています。大阪の内畑某氏の特許になるもので、岩野平三郎は専属としてこの紙を漉いていました。鳥ノ子成紙の上に銀砂子をふりかけ、その上に薄様の楮紙を漉き合わせたものです。

* * *

岩野が小杉放庵[図5]のために作った麻紙は湯筆表現に最適であり、画家自ら「麻紙の放庵か放庵の麻紙か」(書簡 昭和16年2月6日)と理想の紙を得た喜びを表現しました。家督を継いだ二代目岩野平三郎も画紙の技を継承し、その確かな技を認めたのは放庵でした。

【図5】小杉放庵「寒拾出山図」
昭和36(1961)年頃 紙本着色

* * *

前田青邨[図6]や小林古径は雁皮を多く用い、滲みの少ない紙を好んだといえます。



【図6】前田青邨「鯉」
昭和25(1950)～27(52)年頃 紙本墨画

1/3(火)～1/15(日) 休館日：会期中無休

「新春展 一工芸の妙技」



羽田登喜男 変織縮緬地友禅訪問着「花野」
楠部彌弼 「色絵白梅茶碗」

1/3(火)～1/29(日) 休館日：1/16(月)

「新収蔵品展②」



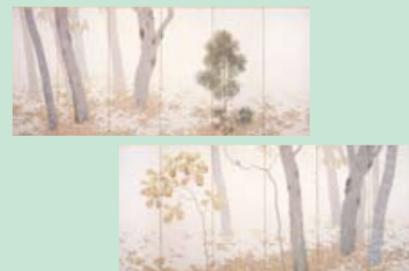
「世界図・日本四時風」(福井県指定文化財)

2/3(金)～2/24(金)

休館日：2/13(月)

「天心ゆかりの画家たち」

近代美術の先駆者岡倉天心は、横浜で福井藩の特産物を扱う貿易商石川屋を営んでいた福井藩士岡倉勘右衛門の次男として生まれました。その関係から当館のコレクションの柱の一つは天心の創設した初期院展を中心とした関係作家の作品となっています。天心生誕150年没後100年という節目の年を2年後に控え、あらためて天心ゆかりの画家たちの珠玉の作品の数々をご覧ください。



菱田春草 「落葉」